



松村昌家『文豪たちの情と性へのまなざし 逍遙・
漱石・谷崎と英文学』

Masaie MATSUMURA, *Passions and Sexuality as Literary
Concern to Shoyo, Soseki, and Tanizaki: Vein of English
Literature in the Three Masters*

(285 頁, ミネルヴァ書房, 2011 年 3 月, 本体価格
3,675 円) ISBN: 9784623058754

(評) 梅正行
Masayuki TOGA

今世紀も数年ほど経ったある春の夕方。ヒーロー空港で搭乗を待っていると、ある方のお姿が目にとまり、ある方と私は、ほぼ同時に声をかけ合った。ある方とは松村先生（書評ながらここでは敬称略さず）で、当地で研究を終えての帰路とおみうけた。他方、評者は放浪しての帰路だった。半分は私事のような話を出したのは、そもそも文学というのは個人的事情抜きには語れない私事の総体が、私小説という限定的な意味とはまた別の次元で、何かの具合で、芸術となったもの（ここですでに評者は著者のリットン論の一部を我流で咀嚼）と日頃から思っていることが、また、外国の空港で松村先生をお見かけすることとディケンズ・フェロウシップの会員の業績に、逍遙、漱石、潤一郎の名を見出しうるということとのあいだに、ある種の類似点を感じ取ったことが関係している。

個人作家の名前を冠する学会で、あるいはその周辺で研究を進める場合、いわゆる若手であれば、その作家以外のことを話題にするには多少の勢いがある。畢竟、若いときの書きものは、だんだんとタワーのような形状になりがちだ。ごく狭い対象に関し、これだけ調べましたという発表や論文をますます目にするようになった昨今、また、一部に画像偏重の傾向著しい昨今、山のかたちのどっしりした書き物が貴重に思えてくる。

タワー型が悪いというのではない。本書中の谷崎にあやかって、ひとつつくりばなしをしよう。ディケンズが借りた家の家賃の支払いに関する書類が、ジェイン・オースティンの『ノーザンガー・アビー』のキャサリンの例の発見物よろしく目の前にあるとする。それはそれでディケンズのなにながしかを語ろうが、およそ研究に対する一種の最終兵器的質問である「それがどうした？」という問いの前には、その手の資料を駆使した研究成果とて、よほど熟達した人の手にかからぬかぎり、もろくも崩れ去る。当今の電気代の請求書でさえ、この日本の現代社会のなにながしかを語る。それが作家の家の電気代の請求書であ

ればなおさらのこと。しかし、ディケンズ生誕二百年にちなんで言えば、今から未来の二百年以内のある時期に、他国の研究者が現代日本の作家の電気代の請求書を発見して嬉々としていたら、われわれの子孫である同時代の日本人は「もっとほかにすることがあるのではないか」と口に出さずとも、思うのではなからうか。フーコーのようにはいかない。

その昔、ダウティー・ストリートのディケンズ・ハウスに出かけ、どうしても、作家の机とか椅子とか、その他の備品に関心がもてなかった。手紙にすらそうであったから、ディケンズ愛が足りないのかもしれない。そう思いつつも、清張、遼太郎、康成、潤一郎、秋声といった作家の記念館が旅の途上であれば寄り、坂井市立丸岡図書館の一角にある中野重治の蔵書を眺めに出かけてしまうのだから、評者は研究方法の分水嶺の上で、引き裂かれているのだと思う。そうしたところには、作家たちの眼鏡もペンもおいてあるのだから。

それやこれやから、ここに取り上げる『文豪たちの情と性へのまなざし』を読むと安堵する。ただし、本書は同じ著者の、これも評者の好きな『明治文学とヴィクトリア時代』より、ものとしては持ちやすいものの、中身として、さらに重く、重い荷物を持ち上げては膝から崩れること幾度であったので、ここでは、本書を飲み込んで別の小さな書評世界をつくることかなわず、本書の属性列挙に甘んじたことを、告白しておく。

本書は、タワー型論文志向の研究者にともするとありがちな軸足を完全にイギリスに移すという姿勢を滲ますこととてなく、片足をイギリスにおきつつも、片足は日本においたままでよいということ、どこにも書いてはないが、その存在をもって語っている点で、本書の大多数である日本の読者の気を楽しませる。それは著者今に始まっての姿勢ではなく、その出版目録を見れば、一目瞭然。単に円高が進むというような理由ばかりでなく若者が海外で暮らすことも視野に入れ出した今、一度は、この種の分水嶺の前で、われわれは立ち止まって考えを整理しておかなければならない。

次に、固有名詞の面白さがある。ワープロで変換しても容易には出てこない名前と、「潤一郎」といった既知の名前が次々と出てきて、スリルがある。イギリスの作家についても言えることで、これは読んだ、あれもこれも読んでいないという作家の名前が次々と出て、ディケンズやエリオットを読んで、なんとなく飽和状態を感じるということが、無学の証でしかないことを思いしらされる。ただ、幸い、著者の論の展開は、こちらにあまり知識がなくともよくわかる。

大きな問題に目を移すと、「日本」の「近代」といった、ともすると人が使うに躊躇すらおぼえがちな用語が、著者によって、わりとさらりと使われている、しかも、それがまさに相応しいところで使われているところを見て、対象のスパンを長くとるときには、書き手もそれに見合うだけの時の経過を経験し

なければならぬと感じさせられる。ここではたと思いつくのは、若いころヴィクトリア朝というのはなんと長いことかと感じられたのに、歳をかさねると、それほど長くもなかったのではないかと思えてきたことだ。

次に本書の各所には、いたるところに、時空の広がりを感じさせる文章が出て来る。「いま—ここ」について書いていながら、読者に「いつか—どこか」を連想させるのだ。

さらにこういう本が東日本の著者からではなく、西日本の著者から出て来るところが、評者には面白い。日本の近代文学というのは東京の文学だから、東京に居ては、今度は時間を間にはさむという客体化上の操作でもほどこさぬかぎり、ときに近代文学が見えなくなるのかもしれない。

そしてこれは、あたりまえと言え、あたりまえの話だが、著者はつねに対象を自分の問題として書いている。近代に生きるひとりの人間の深刻な問題意識が最初から最後まで息苦しいほどにこちらに伝わって来る。著者の日本文学の読みには、日本文学が、そんなことはないのだが、瞬時にわかったと錯覚させてくれる何かがある。たとえば逍遙の読みについて。逍遙が英文学の読みを通じて小説改革を断行したこと。あるいは漱石の読みについて。教科書でさんざんお目にかかりいささか食傷気味のわれわれに、「ディケンジアン」の称号を著者が与えるとき、あの難しい顔をした文豪は、急におもしろい、どこにでも居そうな、それこそ、ディケンズ・フェロウシップの懇親会二次会でもお目にかかれそうなおじさんに見えてくる。むしろ大谷崎の読みについて。その「うそ」論は、ともすると、このときリトル・ドリットは、などと簡単に言ってしまうがちな自分をおおいに恥じ入らせる。

そしてもうひとつ。本書には日本の女流作家がほとんど出てこない。念のため索引を見たところ、「子」の字が見つかったが、それは「高浜虚子」だった。評者は、キプリング、ヘミングウェイ、主要作品を出したあとのナイポールのように男臭い作家を好むものの、職場では、ごく浅い理解ながら、オースティンもギャスケルもエリオットもウルフも読んだ。いや、読ませていただいた。本当はアナイス・ニンあたりを読みたいのだが、古典のほうが安全と安易な作品選びを繰り返してきた。それでもときおり、演習などで女子学生よりも「情」の面でごくまれに深い作品理解に到達していることに気づき、あわてて引き返したことすらある。ところが、著者は近代の女流作家の「情」をここで話題にしない。軸足を両国に交互におく。男性作家に限る。そうした明確な姿勢を示すことができるのは、著者成長の時代の影響ではなく、ぶれぬ著者から自ずと滲み出るスタイルなのか。ぶれないところが、僭越と承知で、とてもうらやましい。そして、本書にはぶれなさの源泉も惜しみなく示されている。